

# ＜マルサス型結婚＞が 歴史事実であるとマズイか？

MacFarlane, *Marriage and Love in England.*

*Chapter 10* 残り

鈴木繁夫  
名古屋大学国際言語文化研究科

# 離婚をしにくい隠れた理由

- (1)妻は夫以外に経済的に頼れる人間が不在  
→別居しながら夫から生活費を手当
- (2)子供の養育権は、基本的には父親にあった。19世紀後半から20世紀にかけて男女平等の養育権となった。

# 離婚をしやくすることで社会を崩すマルサス型 (David Hume)

- (1)子供が養育されなくなる
- (2)そもそも男性は必然性に忍従する性向があるが、忍従を失う。
- (3)夫婦間の争乱が絶えない

# レビレト婚

安定した農業社会では、別な家系での再婚は嫌われる

(1)家系が複合化する

(2)子供がどの家系に所属するかが曖昧になる

# 再婚嫌悪の理由(1)

- ゲルマン社会では嫌われていた。その伝統がキリスト教に入ってしまった。
- ●McFarlaneによる根拠のない推論。
- キリスト教の差別化戦略:
- ローマ社会のモラルに対抗する新たなモラルがキリスト教において形成された。
- →ローマ社会の政治有力者の係累間では再婚が頻繁に行われた
- →The equation of remarriage with adultery ( Mark 10: 10-12; Luke 16:18; )

# 再婚嫌悪の理由(2)

- 16世紀には再婚は重婚と事実上考えられていた。
- なぜなら
- (1)生涯に別な性的メイトを持つことになるから。
  - 初産によって子宮が決まり、経産の場合、初産の面影を引き継ぐ。→telegony先夫遺伝
- (2) 遺産分配について子供が不安に陥る
- (3)寡婦が再婚すると、土地の一部を失うことがあった。

# 再婚

- 14-19世紀まで再婚は実際にはよく行われていた。
- 男性は喪の期間が終わると、女性よりも早く結婚していた。
- 「年配の女性が若い男と結婚し、男は年配になると若い女と結婚する」という定型パターン→金持ちの寡婦を捜す
- 寡婦が結婚相手として人気があった。
- 
- 「配偶者は一人で生涯連れ添うが、それは生きている間だけ」という暗黙の了解があった。Marriage was with one person, for life, but only for life.

# 側室と姦淫

- 側室はイングランドでは制度化されていなかった。
- 姦淫は、結婚を絆を損傷するものとして、嚴罰に処せられた。しかしイングランドでは微罪視された。→「不倫」fornicationとして、未婚者同士の性的関係の枠組みで一括された。

# 子孫系譜と窃盗

- 結婚している者が産めば、自動的にその夫婦間の嫡出とするイングランド法の考え方→非嫡出を嫡出から区別する敷居が低かった。
- イングランドでは姦淫は、窃盗という形式で考えられていた。
- 窃盗：配偶者が相手から享受できる性的奉仕、同伴者としての奉仕を独占的に供与される権利を盗むこと。
- 男性が姦淫を犯すよりも、女性が姦淫を犯すことの方が罪が重い